

# Career Cruising

キャリア・クルージング

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。  
人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、  
各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。



譲れないものが見えたとき、  
芸人としてもひと皮むけた

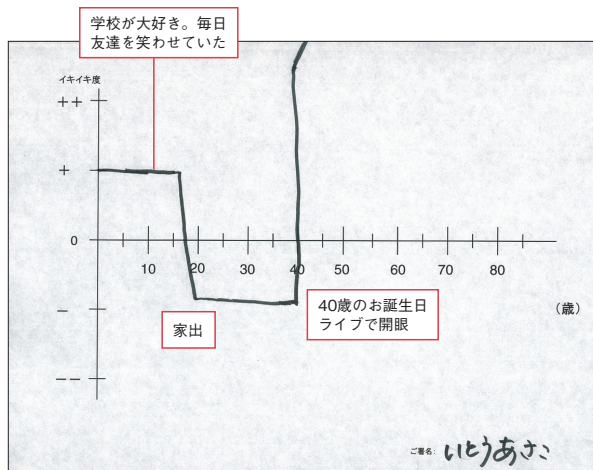
いとうあさこ氏

お笑い芸人

## Career History

### いとうあさこ氏の キャリアストーリー

1970年	0歳	東京都渋谷区に3人兄妹の真ん中として生まれる。実家は裕福で、父は東大卒の銀行員。小学校から高校まで私立の名門校・雙葉学園に通う
		 <p>12歳。当時通っていた雙葉小学校の制服を着て</p>
1989年	19歳	尾崎豊の歌に影響され、家出。シティホテルのアルバイトで知り合った男性と同棲するが、男性が働かなくなり、給料を貢ぐ生活が始まる
1992年	22歳	レストランなどで働きながら、舞台芸術学院に1年半通い、ミュージカルに夢中になる
1997年	27歳	舞台芸術学院在学中に意気投合した同期・佐藤千亜紀氏とお笑いコンビ「ネギねこ調査隊」としてデビュー
2000年	30歳	テレビ番組「進め！電波少年」の企画に参加し、半年間タイの無人島で過ごす
2003年	33歳	コンビを解散。ピン芸人として活動を始める
2004年	34歳	ピン芸人のコンクール「R-1グランプリ」で準決勝まで進む。テレビにも出演し始めるが、仕事は少なく、ストレスの多い日々を送る
2008年	38歳	人気お笑い番組「爆笑レッドカーペット」のイベントで、「浅倉南」ネタが大受け。テレビ番組への出演が増え、世間に名が知られるように。最近では女優や声優など活躍の場も広がっている



直筆の人生グラフ。「お嬢様育ち」だったが、19歳で家出後、公私ともに紆余曲折。芸人として個性を確立した40歳でプラスに突き抜けた。

水色のレオタード姿で人気漫画のヒロインに扮し、「浅倉南、40歳。イライラする！」と観客を笑わせるネタをきっかけにお笑いタレントとして頭角を現した。最近ではバラエティ番組でも存在感を放つ。いまや大活躍のいとうあさこ氏だが、お笑いの世界に入ったのは27歳と遅め。芽が出るまでには10年以上の月日がかかった。

### 自分の意思で生きたいと、 世間を知らないまま19歳で家出

小学校から高校までは名門女子校・雙葉学園に通学。当時から芸能界は大好きで、教室でアイドルの物真似などを披露しては同級生たちを笑わせていたが、後にお笑いの世界に入るとは想像もしていなかった。

「19歳で家出したのも、芸人や女優を目指してのことではないんです。尾崎豊の曲の『自由って何だい』という問いかけに刺激を受け、突っ走ってしましまして。それまで周りの人に気に入られることばかりを考え、自分の意思を抑えてきた反動だったのかもしれない」

家を出て一人暮らしを始めたものの、世間のことは何も知らなかった。自分にもできそうで時給の高いアルバイトを雑誌で探し、サービス業の派遣会社に登録。派遣先のシティホテルで知り合った男性と恋に落ち、同棲生活を始めたが、男性が仕事を辞めてしまい、彼が抱えていた借金を返すために1日16時間働いた。

「20代でつき合った彼は全員、私と出会うとなぜか働かなくなってしまってた。今では『3人に総額1200万円貢いだ』なんてネタにしていますが、当時はそれが苦じゃなかった。好きな人と楽しく暮らせればそれでよかったんです」

### 私、何をやっているんだろう？ 芸人として芽が出ず、焦った

最初の彼と暮らし始めて2年後には「彼の借金を返すテンポをつかみ」、生活に少しゆとりが持てるようになった。そこで思い出したのが、10代で抱いた女優への「淡い夢」だ。

「気づいたときには、舞台芸術学院に通い、ミュージカルを演じる面白さにのめりこんでいました。ピアノやフィギュアスケートなど子どものころの習い事もそうでしたが、やりたいと思うとすぐ飛びつくほうかもしれませんが、なかなか実は結ばないんですけどね（笑）」

舞台上立つうちに、自分がいちばん喜びを感じるのは観客に笑ってもらう瞬間だと気づき、「コメディ女優になりたい」という方向性も見えてきた。そんないとう氏がお笑いを志すようになるのは「勘違い」がきっかけだ。

「当時はお笑いブームで、新しい芸人さんが次々とテレビに登場した時代。先輩たちには失礼な話ですが、お笑いなら芸能界に入りやすいと思い込み、お笑いで名前を売るのが、女優への近道だと考えてしまったんです」

だが、現実は一筋縄ではなかった。舞台芸術学院時代の仲間の佐藤千亜紀氏とコンビを組み、ネタを作ってはライブに出る日々。テレビにはなかなか出演できなかった。30歳で人気バラエティ番組の企画に参加する機会を得たものの、内容は無人島生活を送るというもの。半年間なんとか過酷な生活に耐え、企画自体は成功したが、芸人として名を売るまでには至らなかった。

「それどころか、半年間のブランクでお笑いの感覚がズレてライブでスベリまくるし。その後、相手との関係もギクシャクして最終的にはコンビを解消することになってしまいました」

ピン芸人として再スタートを決めたが、将来の見通しはなく、30代前半は焦るばかりだった。

「周りがどんどん結婚し始めたのも、つらかったですね。お笑い芸人になる夢はあっても仕事は少なく、ご祝儀を払うお金がなくて友人の結婚式にも行けない。私、何をやっているんだろう？ とはよく思いました」

それでも、お笑いをやめようと考えたことはない。「自分でも不思議ですが、やっぱり好きだったんでしょね。もともとは甘い考えで選んだ道ですが、ライブで先輩たちの芸に触れ、『テレビに出ていない人たちでもこんなに面白いなんて、ものすごい世界だ』と惚れ込んでしまったんです。だから、オーディションで落とされるのはつらくても、どうすれば笑ってもらえるのかを考えるのは楽しかった。ネタもせっせと作っていました」

## 絶対面白くなると信じて 工夫を重ねたネタが注目を浴びた

ピン芸人になってまず考えたのが、当時頭角を現して

きた芸人たちとの差別化。誰もやっていないことを半年ほど模索した結果、やっと見つけたのが、自虐的なネタを明るく表現するスタイルだ。

「毒舌にも挑戦したのですが、私が言うとただの悪口になって笑えない。自分の悪口なら遠慮なく言えるからいいかなと思って。とっつきやすいようにキャラクターを設定し、悲愴感を出さずに楽しそうに漫談を試みたら、ライブでのお客さんの反応がよくなったんです」

有名なお笑いのコンクールで準決勝に進出したのもこのころだ。その後もテレビにはあまり出演できない日々が続いたが、自虐ネタはキャラクターをいろいろと変えてライブなどで披露していた。そのキャラクターの1つだった「浅倉南」が注目されたのは、38歳のとき。テレビのお笑い番組関連のイベントがきっかけだった。

「南ちゃんネタではテレビのオーディションには全然受からず、そのイベントでも最初はほかのネタを依頼されました。でも、絶対面白くなると信じて工夫を重ねてきたネタだったので、どうしても捨てたくなくて。スタッフの方たちにお願ひし、思い切ってお客さんの前で披露してみたら、満場の拍手。ものすごくうれしかったです」

その後の活躍は既述の通りだが、「いつまで芸人でいられるかな」というひそかな不安は常にあった。

「吹っ切れたのは40歳記念ライブで『40』と書いた壁紙を体当たりで破って登場し、お客さんが笑った瞬間です。細かいことはもういいやって。私にとって大切なのは、人の笑顔に包まれて生きること。そのための表現の場は1つじゃないと気づき、自分を100%出し切れるようになりました。30代までは、自分の意思で動いているつもりでも、どこか周りの価値観に縛られて窮屈でした。でも、今は本当に自由に生きてる。自由に生き過ぎて恋愛の仕方を思い出せないことだけが悩みです(笑)」



『あさこ40歳。～私、生きてる！～』  
(2010年6月刊 講談社)

## 「人生の折り返し点=40歳」 を契機に個性が開花

大久保幸夫 ワークス研究所 所長

「倅田来未36歳!」「浅倉南38歳!」と、年齢を入れた自虐芸を持ちネタにしているいとうあさこ氏。明るいキャラが売りのお笑い芸人だが、長い間「人生60年」という思いがあり、残り時間が少なくなっていくことに恐怖心すら覚えていたという。

それが40歳の誕生日にお笑いライブをやったそのときに変化が起こった。どうせ彼もいないので誕生日をファンに祝ってもらおうという趣旨(?)で始めたライブの冒頭の出来事。松田聖子氏が歌う「プレシャス・ハート」に乗って、大きな壁紙を破って登場したとき、ファンに「おめでとう!」と一斉に言われて、「私って、幸せかも!?!」としみじみ思ったのである。

彼女の書いた人生グラフでは、40歳でマイナスからプラスに劇的な変化をしている。そのきっかけが上記の瞬間であり、「自分が大事だと思っていることに自信が持てた」し、「すべてのことをポジティブに考えられるようになった」という。この気持ちの変化と符合するように、バラエティに引っ張りだこになり、今ではテレビで見ない日はない活躍である。いとうあさこ氏の、明るく、オープンで、努力家で、謙虚な個性が視聴者に広く伝わり、好感をもって受け入れられたのだろう。

40歳はキャリアの節目といわれることが多い。「中年期の危機」ともいわれるように、老化を実感するというマイナス面の変化が起こる。彼女も、「最近の出来事が思い出せなくなった

り、平らなところで転んだりするようになった」という。その一方で、「アイデンティティの再生」が起こり、自分なりの価値観が確立されて、真の「個性化」が始まるというプラス面の変化も起こる。彼女も、自分という個性をそのまま前に出していくことでいいのだ、という気付きがあったのではないだろうか。「スタッフとの打ち合わせでも、『ここでレオタードはいらないでしょ!』とか、ちゃんと言えるようになった。優先順位が付けられるようになったということ」と語っている。

お笑い芸人としては晩成の部類だろうが、これからは彼女のように40歳過ぎて売れっ子になる芸人が数多く出てくるのではないだろうか。少なくとも「アラフォー芸人」として先駆的な事例となったことは確かである。

### 40歳の節目とは？

無意識を統合して個性的で自立した個人をつくる (C.G.ユング)

早まって拒絶してしまったアイデンティティの声が聞こえるようになる (D.J.レヴィンソン)

誰もが限界や死と向き合う (E.ジャックス)